

特集

ナースが知っておきたい 薬の知識

めざましい頻度で開発され、ますます多岐にわたる薬剤に、私たちは恩恵を受けています。しかし、その情報量はあまりにも膨大ゆえ、医療現場でも薬にまつわる知識が錯綜しているのが現状。一体どの情報を根拠に患者さんへの説明を行なえばよいのでしょうか。

患者さんに納得してもらい、正しく服薬してもらうためには、「薬のことは薬剤師さんに一任」ではなく、患者さんのいちばん近くにいるナースが、ナースにとっても、薬剤師さんにとっても、お互いが重要なパートナーなのです。チーム医療を活性化し、より安心できる医療を実践するため、ナースが知っていたら役立つ知識を紹介します。

知っておきたいパート1：ジェネリック薬品のこと 松山賢治

知っておきたいパート2：薬の飲み合わせのこと 堀美智子

知っておきたいパート3：薬の副作用のこと 林昌洋

看護師として知っておきたいサプリメントの知識 徳山尚吾

看護師と薬剤師のコラボレーションで向上する！ 患者の安全

群馬大学医学部附属病院薬剤部

招待席

「体によい食品」から自由になろう

高橋久仁子さん

特別記事

「フィジカルアセスメントの革新」を身近に

柳屋有里

連載

A-LSD！ 病床からの誘惑・2 —— 甲谷匡賛・西川勝

世界の感受の只中で・2 —— 天田城介

看護師のためのセルフコーチング

自分の人生をコントロールするために・3 —— 鱸伸子・柳澤厚生

患者・看護師双方のためのアクティビティケア・3 —— 六角僚子

見えないものが見えてくる 「臨床感染症」とのつきあい方・3 —— 今村顕史

HIV/AIDS ケア 再考・3 —— 高野操

Pipo さんの疾走ダイアリー・3 —— Pipo さん

アフリカが紡ぐ命の物語・6 —— 井上冬彦

悩めることも才能だ！ 宮子あずさのお悩み外来・18 —— 宮子あずさ

看護学雑誌 第71巻第5号 2007年5月1日発行(毎月1回発行)

発行/株式会社医学書院 代表者 金原優

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 2007, Printed in Japan

1部定価 1,260円(本体1,200円+税5%) 年ごめ予約購読料 13,200円(税込、送料弊社負担)

・定期購読のお申し込み先/(株)医学書院販売部 TEL 03-3817-5659

・第69巻以前のバックナンバーのご注文先/(株)東亜ブック TEL 03-3985-4701

「看護学雑誌」編集室(担当/鶴淵・大野・小田嶋) TEL 03-3817-5772

E-mail kangaku@igaku-shoin.co.jp 医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権(送信可能化権を含む)は(株)医学書院が保有します。

JCLS <(株)日本著作出版権管理システム委託出版物>

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(株)日本著作出版権管理システム(TEL 03-3817-5670, FAX 03-3815-8199)の許諾を得てください。本誌掲載論文・記事のタイトル頁最下段に記された「0386-9830/07/¥250/論文/JCLS」は、1論文1回複写につき250円要することを明示したものです。これは表示のない論文等にも適用されます。JCLSへのご連絡の際には、筆頭著者名・論文名と併せて本表示をご掲示くださるようお願いいたします。

編集後記

●「EYE EYE」コーナーの取材で日本科学未来館へ行ってきました。「科学」という言葉から、途端に専門性や小難しさを連想してしまいがちですが、年齢や文系/理系の壁なく、誰もが「科学は楽しい！」ことを、机上とは一味違う形で、肌で感じることができるよう趣向が凝らされた場所でした。日常では科学を「勉強」する必要性はなかなか感じにくいものですが、それほど私たちの生活を影から支えてくれているということ。医療ももちろん科学の一部です。科学を知るとは、医療という仕事をするうえでもヒントになるはず。日本科学未来館には、今回の記事だけでは紹介しきれなかった科学の魅力がたくさん詰まっています。ぜひ足を運んでみてください。【鶴淵】

●『構造主義生物学とは何か』『下流志向』『何が何だか』『近くて遠山の金さん』『サッカーの上の雲』『もやしもん』。自己紹介がわりに、この1か月読んだ本をリストアップしてみました。うーん……われながら、脈絡がないですね。

3月から、4年振りに本誌を担当することに。初めましての方も、お久しぶりの方も、どうぞよろしくお願い致します。この4年間、弊社刊行『週刊医学界新聞』において、幅広く医学・看護の先生方のお話を伺ってきた成果を本誌に還元！……と意気込みたいところなのですが、冒頭のような読書傾向の私にいったい何ができるのか。とっても不安ですが、皆様からのお力添えと、温かいまなざしをいただければ幸いです。【鳥居】

●少子高齢化が進めば、子ども相手の仕事が減り、高齢者相手の仕事が増える。そんなことは、とっくの昔にわかっていたことです。政府は、ほとんど実現しないような空論を並べて子どもを増やそうとしてきましたが、「実際に子どもが減った場合にどうするか」という現実的対処には目をつぶってきたと言えます。その結果の1つが、産科に続く小児科の危機です。ただ、医療現場で、現実を嘆いてばかりもいられません。今回の特集での報告と提言を踏まえて、少しでも小児看護の質が維持できるよう、がんばっていききたいものです。病棟で小児に携わっていないからと言って、誰もが無関係ではありません。なぜなら、子どもは社会で育てていくものだからです。【大野】